

丸山仁司 編集

『内部障害系理学療法実践 マニュアル』

黒川幸雄
(新潟医療福祉大学)

内部障害との関係は古くて新しい

本書の有用性を説明する前に、リハビリテーションや理学療法との関係で、内部疾患とそれによる内部障害の位置付けが、どのように変化してきたかを概括してみる。

編者の丸山仁司氏が、序文にも挙げられた循環器疾患、呼吸器疾患、代謝疾患、腎臓疾患、膀胱直腸障害、消化器疾患、悪性新生物(癌含む)、その他の疾患によるところの機能障害・能力障害・社会的不利の発生に対するリハビリテーション医療、理学療法の役割は、昭和40年代のリハビリテーションや理学療法の草創期から気付かれていたことである。とりわけ呼吸器疾患(結核、肺炎など)に対しては、肺理学療法、呼吸理学療法(リハビリテーション)などとして、成書ともなり、親しまれてきたものである。心疾患への関心は、1985年以降脳卒中を追い越し、死亡原因順位が第2位になる頃より関心が高くなってきている。最近は、とみに生活の欧米化により糖尿病・肥満・高血圧などを筆頭に生活習慣病が蔓延しはじめ、この分野での理学療法の活躍が待たれるところであるが、診療報酬上の担保がないと、医療機関としても理学療法を使うようになれないのが問題である。

しかし、日常臨床でみている患者様や障害を有した人には、なんらかの内部障害の合併した人が多いので、対応が必要になっていることが多い。

日常臨床における必携の書として活用してみてはいかがでしょう

本書の構成は、「基礎編」、「疾患別理学療法」、「でたでたチェック」の3部構成である。特にⅢの「でたでたチェック」は、患者様の自覚症状の把握に的確に努め、未然に増悪にならないよう努めることの重要性を語っている。命名がユニークだが、内容は出現してきた表情の背景に隠される、予測される病態の重要性を記述している。理学療法士が、安心に足る専門職種であるかどうかは、一つ一つの微細な表情に敏感に対応してくれる頼れる存在であるかどうかにかかっている。深い洞察と知識に裏づけされた対応力が期待されている。

第1部の「基礎編」は、基礎的評価とその治療であり、理学療法が内部疾患患者様の障害を運動面から評価し、運動面から、とりわけ体力に対する治療・指導を行わなければならない。内部疾患の原因治療と2次的障害に対する対症療法の一環として、絶えず基本におかなければならないことである。

第2部の「疾患別理学療法」は、疾患ごとに特異的な内部障害とそれに伴う各種障害を提示し、理学療法的治療を示している。

編者の丸山仁司氏は、この分野の第一人者であり、執筆者のすべてが第一線の臨床家であり、臨床を教育に生かしている教育者でもある。本書は、直近の臨床に日々従事する多くの若手臨床家や、臨床実習などで苦労している学生にとっても、有効な書物として、携帯電話と同じように絶えず見開いて確認するに足るマニュアルである。

●ポケット判 488頁 2色刷
定価(4,500円+税)
2004年 文光堂・刊